

横浜考古学事始

－ 100年前の歩けオロジスト・小林與三郎のこと －

岡 本 孝 之

- | | |
|---------|----------|
| 1. はじめに | 3. 横浜の遺跡 |
| 2. 年譜 | 4. まとめ |

1. はじめに

横浜の考古学の草創期に、市内外を広く踏査して多数の遺跡や貝塚を発見した考古学の歩けオロジスト・小林與三郎について報告したい。

岡本勇先生は神奈川県考古学史をまとめた『神奈川地域史研究』第2号掲載の「明治時代神奈川県下考古学研究の先駆者たち」（岡本1985）に、「小林與三郎は、明治30年代の前半に専ら活躍した人ですが、相模をはじめ伊豆、栃木等かなり広い範囲にわたって動き回ったようです。後に朝鮮の釜山に行ったことはわかっておりますが、現地でどういうことをしていたかという点に関しては不詳です。」と指摘していた。

平塚市の考古学史をまとめた時、東京帝国大学で1898年に編纂された『日本石器時代人民遺物発見地名表』第2版に平塚市土沢、大畑、金目などで土器などを採集した小林與三郎を知った（岡本1999）。小林は横浜市内とその周辺部でも多くの遺跡を発見し、『日本石器時代人民遺物発見地名表』に掲載されている。横浜の遺跡を最も多数報告しているのである。

栃木県での仕事とは、栃木県における弥生文化研究の第1頁を飾る野沢遺跡の出土遺物の紹介であった。1996年に栃木県立なす風土記の丘資料館刊行の第4回企画展『弥生人のくらし』に掲載されている年代順の「栃木県関係弥生時代文献目録」の第一行目にその名が出る。沼田頼輔との共同執筆による報告が『東京人類学会雑誌』に掲載されているのである。

横浜と、弥生と、そして韓国と関心が重なったため『東京人類学会雑誌』と『日本石器時代人民遺物発見地名表』（以下、地名表と略記する）を直接調べてみることにした。

2. 年譜（第1表）

小林與三郎の経歴は、第1表のようにまとめられた。『東京人類学会雑誌』に始めて登場するのは第139号（1897(明治30)年10月28日）の雑報で、10月28日の東京人類学会129例会で「横浜近傍ノ石器時代遺跡」を発表し、同日付けで東京人類学会に入会している。住所は「横浜市元町5丁目213番地 斧部方」となっている。

この発表の成果が、翌年5月に刊行された地名表の第2版であると思われるが、注目される

第1表 小林與三郎の経歴

年	月 日	出典・記事
1894(明治27)年	7月～10月	野沢遺跡発掘(小林・沼田1900)
1897(明治30)年	10月 3日	東京人類学会129例会 「横浜近傍ノ石器時代遺跡」を発表
	10月28日	東京人類学会雑誌第13巻第139号刊行 雑報に例会記事 新入会員に「横浜市元町5丁目213番地斧部方 小林與三郎」
	10月28日	東京人類学会雑誌第13巻第139号付録の「明治30年10月調 東京人類学会会員宿所姓名簿」刊行 「横浜市元町5丁目213番地斧部方 小林與三郎」
1898(明治31)年	5月12日	『日本石器時代人民遺物発見地名表』第2版刊行 信濃8・上野1・下野9・陸奥6・伊豆3・武蔵39・相模13・下総2の81遺跡を示す
	9月11日	東京人類学会138例会 「横浜地方の遺跡」を発表
	9月28日	東京人類学会雑誌第13巻第150号刊行 雑報に例会記事
	10月20日	東京人類学会雑誌第14巻第151号付録の「明治31年10月調 東京人類学会会員宿所姓名簿」刊行 「横浜市元町5丁目214番地木口銀藏方 小林與三郎」
1899(明治32)年	4月 2日	東京人類学会145例会 「横浜元町の貝塚」を発表
	4月20日	東京人類学会雑誌第14巻第157号刊行 雑報に例会記事
	8月	下野へ帰省(小林・沼田1900)
	10月20日	東京人類学会雑誌第15巻第163号付録の「明治32年10月調 東京人類学会会員宿所姓名簿」刊行 「横浜市中村1521(地蔵坂) 小林與三郎」
	12月 3日	東京人類学会151例会 「下野国野沢発見の遺物」を発表
	12月20日	東京人類学会雑誌第15巻第165号刊行 雑報に例会記事
1900(明治33)年	1月20日	東京人類学会雑誌第15巻第166号 「下野国河内郡野沢発見の土器に就て」を発表(述、沼田頼輔記) 12月に朝鮮国釜山の郵便局に転ずるの記事
	1月20日	東京人類学会雑誌第15巻第166号 雑報に「小林氏の韓国行」記事 昨年暮れに韓国釜山の郵便局に赴任
	2月20日	東京人類学会雑誌第15巻第167号 雑報に「小林氏の韓国通信(1月22日)」記事 「韓国釜山郵便局、小林與三郎」住居所は西山下町
	4月20日	東京人類学会雑誌第15巻第169号 雑報に「小林與三郎、藤井秀、両氏所有の古器物」記事
	10月20日	東京人類学会雑誌第16巻第175号付録の「明治33年10月調 東京人類学会会員宿所姓名簿」刊行 「朝鮮国釜山郵便局 小林與三郎」
	11月20日	東京人類学会雑誌第16巻第176号 雑報に「在釜山小林與三郎氏よりの來書(11月6日発)」記事
	12月20日	東京人類学会雑誌第16巻第177号 八木英三郎「韓国通信」に記事あり 11月「4日午前8時過小林與三郎君は日曜を幸い余等一行と共に近傍迄同行」
1901(明治34)年	4月15日	『日本石器時代人民遺物発見地名表』第3版刊行 武蔵国で19追加、4遺跡で補足、羽前1・下野4・加賀1・大和1を追加、韓国なし
	5月20日	東京人類学会雑誌第16巻第182号 雑報に「人類学教室への献納品」記事 明治33年9月より本年5月5日迄の献納者氏名に「韓国慶尚南道発見の祝部土器11個 小林與三郎」あり
	8月20日	東京人類学会雑誌第16巻第185号 八木英三郎「韓国探検報告其一」に小林與三郎への礼辞
1905(明治38)年	7月 1日	通信大臣官房秘書課『通信省職員録』にない(明治40・42・43年版には韓国を含まない)
	12月20日	東京人類学会雑誌第21巻第237号 会費納入者にあり
1907(明治40)年	3月20日	東京人類学会雑誌第22巻第252号 会費納入者にあり
1908(明治41)年	1月20日	東京人類学会雑誌第23巻第262号 会費納入者にあり
1910(明治43)年	1月20日	東京人類学会雑誌第25巻第286号 会員転居欄に「韓国釜山南濱町2ノ31 小林與三郎」とあり
	6月20日	東京人類学会雑誌第25巻第291号 会費納入者にあり
	11月 1日	朝鮮総督府通信局『朝鮮総督府通信官署職員録』にない 新居勝三郎あり
1911(明治44)年	2月20日	人類学雑誌第26巻第299号 会費納入者にあり
1912(明治45)年	2月10日	人類学雑誌第28巻第2号 会費納入者にあり
1914(大正3)年	12月20日	人類学雑誌第29巻第12号 入会者稲本新臣の紹介者となる
1915(大正4)年	2月20日	人類学雑誌第30巻第2号 入会者新居勝三郎の紹介者となる「朝鮮釜山西町1丁目郵便局官舎」
1917(大正6)年	12月15日	『日本石器時代人民遺物発見地名表』第4版刊行 追加なし 韓国もなし
1918(大正7)年	4月25日	人類学雑誌第33巻第4号 新居勝三郎「朝鮮慶尚南北道に於ける石器発見一覽表」発表 小林の名でず
1921(大正10)年	12月 日	人類学雑誌第412～416号付録の「東京人類学会会員名簿」にあり「尊国釜山南濱町2丁目31」
1922(大正11)年	12月 日	人類学雑誌第428号付録の「東京人類学会会員名簿」にあり「韓国釜山南濱町2丁目31」
1925(大正14)年	12月 日	人類学雑誌第457号付録の「東京人類学会会員名簿」になし

のは横浜市周辺の遺跡だけでなく、信濃 8・上野 1・下野 9・陸奥 6^(註 1)・伊豆 3・武蔵（横浜、東京、埼玉を含む）39・相模 13・下総 2 の 81 遺跡を示していたことである（第 1 図・第 2 表）。これは岡本先生の指摘を大きく越えて東日本の広い地域の遺跡を発見しており、そのような行動力の背景には、彼の職業、地位が反映されているものと思われるが、それが判明する記述は見られない。

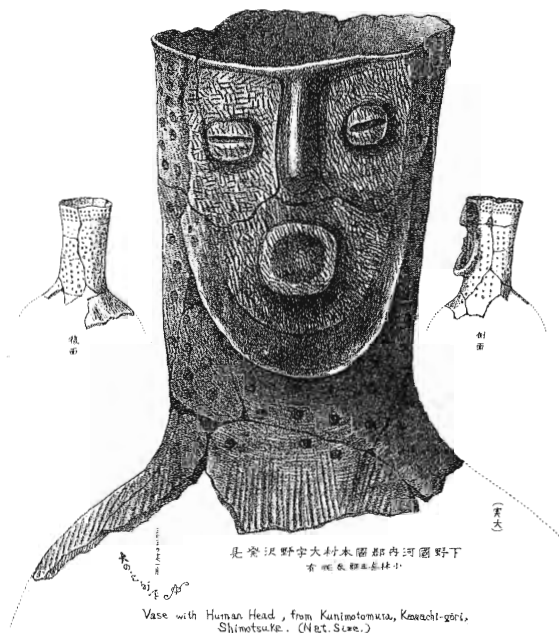
1898（明治 31）年 9 月 11 日の東京人類学会 138 例会で「横浜地方の遺跡」を発表し、同月 28 日の『東京人類学会雑誌』第 150 号の雑報に例会記事が掲載される。1901（明治 34）年 4 月 15 日刊行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』第 3 版には武蔵国で 19 遺跡を追加し、4 遺跡で補足しているので、その分の発表と思われる。鶴見区、神奈川区で新しい踏査を行い、中区、南区でも追加の調査を実施している。

10 月 20 日刊行の『東京人類学会雑誌』第 151 号付録の「明治 31 年 10 月調査東京人類学会会員宿所姓名簿」には「横浜市元町 5 丁目 214 番地 木口銀蔵方」とあり、隣接番地に転居していることを示している。214 番地は現在は道路（本牧通り）の拡幅で大きく滅失しているが、元町商店街入口の裏に位置する。

1899（明治 32）年 4 月 2 日の東



第 1 図 小林與三郎発見の県別遺跡数
(地名表第 2 版 + 第 3 版の数値を示す。ただし横浜市分 34 + 14 を除く)



第 2 図 野沢遺跡出土人面土器（小林・沼田 1900）縮尺 3 分の 1

京人類学会145例会でも「横浜元町の貝塚」を発表し、同月20日の『東京人類学会雑誌』第157号の雑報に例会記事がある。

10月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第163号付録の「明治32年10月調 東京人類学会会員宿所姓名簿」には「横浜市中村1521（地蔵坂）」とあり、また転居している。現在の中区山手

第2表 小林與三郎発見遺跡一覧表（神奈川県以外）

国	所在地	遺物	地名表版No.
陸奥国	東津軽郡浜館村	石器、土器	2・3
	同郡 築木館	石器、土器	2・3
	同郡 文栗坂	磨石斧	2・3
	中津軽郡茶臼館	土器玩具、石鏃、土器	2・3
	三戸郡八戸町在石手洗村	土器	2・3
	弘前市内大円寺境内	打石斧	2・3
羽前国	東田川郡新井堀村	石棒	3
上野国	邑楽郡館林茂林寺近傍	土器	2・3
下野国	河内郡豊郷村大字山本	土器	2・3
	同郡 同村 大字関堀	土器	2・3
	同郡 同村 大字岩本	土器	2・3
	同郡 同村 大字田原	土器	2・3
	同郡 同村 大字竹林	土器	2・3
	同郡 国本村大字野沢字石塚	石剣、曲玉、人面付土器	3
	同郡 姿川村小学校付近	石鏃、土器	3
	同郡 清住町外レ	石鏃、土器	3
	宇都宮市日野町	石棒	2・3
	那須郡佐久山町字ジヤ	石鏃、土器	2・3
武蔵国	塩谷郡阿久津町字ドウバラ	打磨石斧、砥石、凹石、土器、3石鏃	2・3
	同郡 塩原湯 代綱ヨリ一里半程手前	土器	2・3
	足利郡足利町畑神山	凹石	3
	東京市麻布区弁町弁坂上	土器	2・3
	同市 赤坂区青山墓地貝塚	打磨石斧、土器、凹石、石鏃、糸掛石	3
	荏原郡日黒村火薬庫付近	打石斧、土器	2・3
	同郡 中目黒金比羅神社付傍	打石斧、土器	2・3
	同郡 駒場村農科大学近傍	打石斧、土器	3
	豊多摩郡渋谷村渋谷停車場線ヲ1丁余 目黒方面ノ方角側ノ畑中	石鏃、土器	3
	北豊島郡上板橋村	打石斧、土器、砥石	2・3
下総国	同郡 王子村試験場構内貝塚	打磨石斧、土器	3
	南多摩郡七生村字高幡付近	打石斧	2・3
	北足立郡大宮町氷川神社境内	土器	3
	東葛飾郡中山村中山	石器、土器	2・3
	香取郡津ノ宮村近傍	土器	2・3
信濃国	東筑摩郡中山村大字塩原中山 (松本ヨリ南方へ一里半)	石鏃	2・3
伊豆国	同郡 広岡村	打石斧	2・3
	同郡 広岡村桔梗ヶ原	打石斧	2・3
	同郡 大村諏訪社内	打石斧	2・3
	同郡 大村玄向寺内	打石斧	2・3
	下高井郡倭村大字柳沢	石鏃、磨石斧、石棒、有穴石器	2・3
	同郡 夜間勢村字伊勢宮付近	石鏃、土器、打磨石斧、3石七	2・3
	上水内郡長野師範学校内	石鏃	2・3
	加茂郡狩野村元立野村	石鏃・砥石・土器	2・3
	同郡 同村 字柏久保	石鏃	2・3
	君津郡三島町小学校付近	磨石斧・石鏃・土器	2・3
加賀国	金沢市公園地内池ノ付近	石鏃	3
大和国	葛上郡御所町ヨリ金剛山ニ行ク途中	磨石斧	3

3は第3版で追加されたもの

町115番地であり、下宿から戸建に独立したのであろうか。当時の地藏坂は横浜でも活気ある町であったようだ。115番地は地藏坂から一寸入った裏手の斜面中段で、一隅に不動尊の小祠があった。

そして、12月3日の東京人類学会151例会では、「下野国野沢発見の遺物」を発表している（第2図）。同月20日の『東京人類学会雑誌』第165号の雑報に例会記事がのり、翌1900（明治33）年1月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第15巻166号に「下野国河内郡野沢発見の土器に就て」を発表している。これは小林の発表を沼田頼輔が記録して補記したものである。小林が直接執筆できなかった理由として、小林は12月に朝鮮国釜山の郵便局に転ずるため多忙であるとされている。同号雑報にも「小林氏の韓国行」の記事がある。「昨年暮れに韓国釜山の郵便局に赴任」とあり、横浜でも郵便局に勤めていた可能性があるが確認できない。沼田は、「小林與三郎氏は斯学篤志の人なり」と紹介しているのみである。1901（明治34）年4月15日刊行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』第3版には、さらに羽前1・下野4・加賀1・武蔵19・大和1の26遺跡を追加しており、依然として東日本の全域を行動していたことが知られる。発見した遺跡は合計107遺跡となる。この発表で小林は1894（明治27）年7月～10月に野沢遺跡を発掘し、発表の直前の明治32年8月に下野へ帰省したと述べているので、栃木県の出身者であることは間違いないであろう。

さて、小林の韓国行きは日本の韓国併合（1910年）以前であり、日露戦争（1904年）の直前である。1900年2月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第167号の雑報に「小林氏の韓国通信（1月22日）」の記事があり、「韓国釜山郵便局、小林與三郎」、住居所は西山町とある。

4月20日の『東京人類学会雑誌』第169号の雑報には「小林與三郎、藤井秀、両氏所有の古器物」の記事がある。小林が韓国行きに際して自己の採集品を人類学会に寄贈したことを顕彰している。栃木県野沢遺跡の土器はこの後山内清男1932や杉原莊介1936らによって利用されているように現在も東京大学総合博物館に保管されている。横浜市内の採集品も存在する可能性がある。

10月20日の『東京人類学会雑誌』第175号付録の「明治33年10月調 東京人類学会会員宿所姓名簿」には「朝鮮国釜山郵便局 小林與三郎」とある。11月20日の『東京人類学会雑誌』第176号の雑報に「在釜山小林與三郎氏よりの来書（11月6日発）」の記事があり、釜山においても考古学的な活動に意欲のあることを示している。それは12月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第177号の八木英三郎「韓国通信」で確かめることもできる。11月「4日午前8時過小林與三郎君は日曜を幸い余等一行と共に近傍迄同行」とある。この八木の韓国調査は、日本考古学の東亜考古学としての最初期のものであり、それに協力していたのである（岡本1975）。

翌1901（明治34）年5月20日の『東京人類学会雑誌』第16巻182号の雑報に「人類学教室への献納品」の記事があり、明治33年9月より本年5月5日迄の献納者氏名に「韓国慶尚南道発見の祝部土器11個 小林與三郎」とある。8月20日の『東京人類学会雑誌』第185号の八木英

三郎「韓国探險報告其一」には小林與三郎への礼辞がある。

これ以後、小林與三郎の名は雑報欄から見えなくなる。わずかに転居欄などに「韓国釜山南濱町2ノ31 小林與三郎」と1910(明治43)年1月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第25巻286号に認められることと、入会者の紹介者として登場するのみである。他は会費納入者欄に1912(明治45)年2月までを確認したにとどまる。

入会者は稲本新臣と新居勝三郎であるが、新居の住所は「朝鮮釜山西町1丁目郵便局官舎」であり、新居は1917年に『人類学雑誌』第33巻第4号に「朝鮮慶尚南北道に於ける石器発見一覧表」を発表している。だがそこには小林の名は出てこない。

小林は1922(大正11)年までの「東京人類学会会員名簿」に名前を載せているが、1925(大正14)年のそれには無くなっている。1917(大正6)年12月15日刊行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』の第4版には小林による新しい追加はなく、韓国でも認められない。考古学的な活動はもう停止していたのであろうか。

韓国釜山郵便局勤務が判明したので、通信総合博物館において当時の職員録を調べてみたが確認することはできなかった。1886(明治19)年10月31日発行の『郵便局職員録』になかったのは、小林の成人以前のもものと予想させるから当然にしても、1905(明治38)年7月1日発行の通信大臣官房秘書課『通信省職員録』にないのはなぜなのだろうか。明治40・42・43年版には韓国を含まないが、明治38年版はまだ朝鮮を含んでいるのである。また、1910(明治43)年11月1日発行の朝鮮総督府通信局『朝鮮総督府通信官署職員録』にも認められなかった。小林は1915(大正4)年頃までは釜山に住んでいたことは確実であるが、郵便局勤務から外れていたのであらうか。通信関係の仕事も異動の多いものと思われるが、住居を釜山に落着かせているので、公務から離れていたのであらう。転勤直後の釜山の職員録や直前の横浜の職員録をぜひとも確認したい(註2)。

3. 横浜の遺跡(第3・4表, 第3～5図)

横浜市内では「税関山」遺跡が最初の発見地である。1897(明治30)年の地名表の第1版の頃は、現在の中区、西区の大半だけが横浜市内で、税関山遺跡の人類学教室蔵品の石鏃が示されている。これは今も税関の官舎のある周辺を示し、西区の池の坂貝塚に相当するものである。

横浜の考古学の第1頁を飾るのは富士谷孝雄による中村富士塚貝塚(註3)の紹介であり(富士谷1883), そこには中村八幡付近貝塚の位置も示していた。この富士谷に教示されて坪井正五郎と白井光太郎も中村を訪れ、横穴と貝塚の関連を議論するのである(白井1932)。その後、鳥居龍蔵と井上喜久治も中村(藤塚)貝塚を調査するが(井上・鳥居1893a), 当時はまだ久良岐郡中村である。近隣では同郡根岸村(坂ノ台貝塚か)と根岸村近傍マカドヒラダイ(坪井1888)(註4)の土器や石斧などが人類学教室蔵品としてあったにすぎない。鶴見・神奈川区周辺

でも橋樹郡駒岡村貝塚（井上・鳥居1893b）、子安村貝塚、馬場村貝塚、東寺尾貝塚（以上、阿部1893）、生見尾村大字鶴見字二見台貝塚（内山1894）などが登録されていたにすぎない。すなわち、現在の鶴見、神奈川、西、中区内では以上の9遺跡だけであったのである。

翌1898（明治31）年発行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』第2版には、沼田頼輔、野中完一、大谷木耐三らによる登録遺跡が増加するが、中でもっとも多いのが第3・5表で示したように小林與三郎による発見である。

これらの遺跡は、中区の山手町と根岸町周辺、西区の西戸部町周辺、南区堀ノ内から磯子区杉田周辺、神奈川区子安町から鶴見区東寺尾周辺のグループに区分することができる。子安町から東寺尾への踏査は、第3版の地名表に初めて見えるものなので、1898（明治31）年以後の成果である。これらの多くは現在も遺跡地図（横浜市教育委員会1992）に登載されているが、忘れられている遺跡もある。市内中心部の遺跡は早い都市化によって再確認できず、発見も期待されず、空白の地域が多いので、小林の成果をできるだけ復元する必要があると思う。

貝塚の調査は、松下胤信や石野瑛らによって継続しており、酒詰仲男による地名表作成にいたる研究がある（酒詰1938・1959・1967）。石野もまた地名表を作成している（石野1927・1938・1953・1963）。赤星直忠と岡本勇先生による神奈川県史（1979）、神奈川県教育委員会（1971）や横浜市教育委員会（1992）による遺跡地図がある。これらの考古学的成果と近年の区史、郷土誌などからできるだけ接近してみたい。

（1）中区周辺（第3図）

元町貝塚や山手貝塚は現在の遺跡地図にも搭載されている。谷奥の山手貝塚については、松下胤信の調査記録（松下1933）、丘陵先端の元町貝塚については1928年10月6日に発掘の記録があり（栗原1928）、石野瑛も1931年に発掘し（石野1953）、岡野隆男が貝層から土器片を採集している（岡野1973）。塚田明治の記録（塚田1974）もある。酒詰仲男は両者を一括して山手町貝塚としている（酒詰1938）。小林の報告した金比羅神社は確認できない^{（註5）}が、坂の上の崖面に貝殻の散布が認められた。山手貝塚は現在の貝殻坂周辺に位置し、現在も貝殻の散布を認めるが小林のイジン坂は再確認できていない。貝殻坂をさすのだろうか。

根岸村のうち、オオシバダイ、ツカゴシは現在の大芝台、塚越に相当する。塚越には今、3遺跡が確認されているが、酒詰仲男1934の指摘した坂下塚越と重なる可能性がある。ヒナソは再確認できないが坂の台貝塚の異称であり同一とされる。松下胤信は「横浜に存する多くの先史時代遺跡中、最も優秀な遺物を出す」としている（松下1930）。地名表第1版の根岸町遺跡は本遺跡とされる。アラクは不明。六地藏坂は『磯子の史話』1978にあり、馬場町と坂下町の境で中区寺久保にあがる坂道で当時は中区内への通勤路としてにぎわった道という。坂の下に六地藏がある。坂の台貝塚の北西にあたる。ダイバタケも不明だがこれは競馬場の西側ということではほぼ特定できる。酒詰仲男1934に台畑とあり地名ではなく一般名かもしれない。先のアラクも新墾の一般名かもしれない^{（註6）}。旧競馬場西側の馬頭観音付近にて貝の散布をみた。カ

第3表 小林與三郎 神奈川県内発見遺跡一覧表

No.	所在地	貝塚	遺物*	地名表版No.	酒詰伸男1938	石野瑛1953	県No.	市No.
1	横浜市元町1丁目金比羅神社裏	貝塚	3凹石・土器	2・3・4	山手町	金比羅神社裏	中8	中3
2	横浜市山手外人墓地イジン坂	貝塚	土器・3打石斧・3貝輪	2・3・4	山手町	異人坂	中7	中2
3	久良岐郡根岸村オシバダイ		磨石斧・土器	2・3・4				中4
4	久良岐郡根岸村ツカゴシ		土器	2・3・4				中5
5	久良岐郡根岸村ヒナツ	貝塚	土器・石器	2・3・4	坂ノ台	根岸坂ノ台	中6	中8
6	久良岐郡根岸村アラク		磨石斧	2・3・4				
7	久良岐郡根岸村サカノダイ		石棒・石器類	2・3・4	坂ノ台	根岸坂ノ台		中8
8	久良岐郡根岸村字六地藏坂		打磨石斧	2・3・4				
9	久良岐郡根岸村競馬場ノ西側ダイバタケ		打石斧	2・3・4				
10	久良岐郡根岸村不動堂ノ裏字カソノダイ		土器	2・3・4				中5
11	横浜市北方天沼キリン麦酒製造所構内		磨石斧・土器	3・4				
12	久良岐郡本牧村ニノ谷入口右方字オヤト	貝塚		3・4	二ノ谷	二ノ谷		
13	久良岐郡中村1187番地和田清兵衛宅 及八幡神社近傍	貝塚		2・3・4	中村187番地	八幡神社付近 中村八幡社近傍	南(1)	
14	横浜市野毛山貯水池西端ノ畑		土器・黒曜石	2・3・4		野毛山貯水池西端	西5?	西14
15	横浜市野毛山大神宮裏手	貝塚	打磨石斧・土器	2・3・4	伊勢山大神宮裏手	伊勢山大神宮本殿	西4	西15
16	横浜市戸部税関官舎付近字池ノ坂		打3磨石斧・土器・砥石 ・石器・石鏃	2・3・4	池ノ坂	池ノ坂	西2	西13
17	横浜市戸部監獄署構内ヨリ暗黒坂付近		土器	2・3・4				
18	横浜市戸部字天王山		土器	2・3・4		天王山	西3	西12
19	横浜市戸部太町戸部字ヤブシタ	貝塚		2・3・4	蔵下町×			
20	横浜市戸部太町古井戸		土器	2・3・4		古井戸		
21	横浜市戸部太町戸部109番地		打石斧	3・4				
22	横浜市太田字久保山墓地		土器	2・3・4				
23	横浜市太田ヨリ久保山墓地ニ行ク左方ノ 台塚アル近傍		土器	2・3・4				
24	橋樹郡程ヶ谷町字岩間村		打磨石斧・土器	2・3				
25	橋樹郡程ヶ谷町字岩間ノ大原クヨウ塚近傍		打石斧・土器	2・3・4				
26	久良岐郡堀ノ内村 (神奈川県埋蔵物貯蔵庫近傍)	貝塚		2・3・4		爆発物貯蔵庫跡付近		南51
27	久良岐郡堀ノ内村貝殻畑及女坂			2・3・4	女坂・貝殻畑×	貝殻畑		南51
28	久良岐郡堀ノ内村字柿ヶ谷 神奈川県埋蔵物貯蔵庫ノ前、大殺ノ家ノ前	貝塚		2・3・4	柿ヶ谷			磯6
29	久良岐郡屏風浦村大字岡根岸監獄裏手		土器	2・3				
30	久良岐郡屏風浦村大字天神宮裏手台		土器・打石斧	2・3・4				
31	久良岐郡屏風浦村大字森字森ノ大塚ノ東南ノ崖		打磨石斧・土器	2・3・4		森大塚付近		磯15
32	久良岐郡屏風浦村中原		石棒	2・3・4		中原町		
33	久良岐郡杉田村八幡神社付近		土器	2・3・4				
34	久良岐郡大岡村岡村		土器・打石斧	2・3・4				磯1
35	久良岐郡大岡村大塚ノ傍		打磨石斧・土器	2・3・4				
36	橋樹郡神川町高島山裏手付近		土器・石器	2・3・4				神69
37	橋樹郡三沢町豊額寺近傍		土器・打石斧・3石鏃	2・3・4	豊額寺付近			
38	橋樹郡生見尾村大字鶴見字二見台 射的場上ノ畑中電柱ノ下	貝塚		3	馬場?			鶴89
39	橋樹郡同所ヨリ一丁程神奈川ノ方ニ 寄タル處電話柱 609号ノ下	貝塚		3	荒立台上			
40	橋樹郡同所付近字東台		打石斧	3	荒立台上	荒立	鶴29	鶴97
41	橋樹郡生見尾村東寺尾字鶴見蛇池ノ上	貝塚		3	三笠園内?			
42	橋樹郡生見尾村東寺尾		石鏃	3・4				
43	橋樹郡生見尾村東寺尾字原 斎藤市五郎所有畑中	貝塚	土器	3	荒立台上			鶴94
44	橋樹郡生見尾村生変蔵坂不動上 東寺尾字カザハヤ	貝塚	土器・打石斧	3・4	風早台	風早台	鶴34	鶴107
45	橋樹郡子安村字ツクリ松	貝塚	打石斧・土器	3・4	風早台	打越		
46	橋樹郡子安村西寺尾コガイ原焼場ノ前ノ塚近傍		打石斧・土器	3・4		火葬場付近		神33
47	橋樹郡子安村稲荷山	貝塚		3・4	面蔵稲荷山	稲荷山		神77?
48	橋樹郡子安村本慶寺裏山ノ新道		打石斧・石鏃・土器	3・4				
49	足柄下郡前羽村前川近戸神社辺		土器	2・3・4				
50	足柄下郡下曽我村谷津寺前		石棒・石鏃・砥石・土器	2・3・4				
51	足柄上郡中村字井ノ口村		土器・石棒	2・3・4				
52	陶綾郡大磯町虎御石前		土器	2・3・4				
53	大住郡土沢村		土器	2・3・4				
54	大住郡金目村		土器	2・3・4				
55	大住郡間崎村		土器	2・3				
56	大住郡伊勢原町付近		土器	2・3・4				
57	大住郡大畑村		土器	2・3・4				
58	大住郡高部屋村字西高岡		土器	2・3・4				
59	大住郡桑野町小学校前		土器	2・3・4				
60	大住郡西桑野村字渋沢村		土器・石棒	2・3・4				
61	大住郡大槻村大槻天神付近		土器	2・3・4				

* 3は第3版に加えられたもの ×は未確認のもの

第4表 小林與三郎 神奈川県内発見遺跡現所在地・文献一覧表

No.	所在地	遺跡名	時期	文献
1	横浜市 中区元町1丁目（金比羅神社裏）	元町貝塚	加E・堀	栗原清一1928, 石野 瑛1938・1953, 岡野隆男1973, 塚田明治1974
2	山手89～102(外人墓地字イジン坂)	山手貝塚	加E・堀	松下胤信1933, 神奈川県史1979
3	大芝台（オオシバダイ）			
4	塚越（ツカゴシ）		関山	石野 瑛1927, 酒詰仲男1934
5	寺久保（ヒナソ）	坂ノ台貝塚	堀ノ内	マンロー1908, 石野 瑛1927, 松下胤信1930, 神奈川県史1979
6	（根岸村アラク）			
7	寺久保（サカノダイ）	坂ノ台貝塚	堀ノ内	マンロー1908, 石野 瑛1927, 松下胤信1930, 神奈川県史1979
8	磯子区坂下町・馬場町（六地藏坂）			
9	中区根岸旭台（競馬場ノ西側ダイバタケ）			
10	滝ノ上（カソノダイ）	加瀬台遺跡	燃糸文	石野 瑛1927, 横浜市史1958
11	諏訪町・山手町（天沼）			
12	間門町1丁目（二ノ谷字オヤト）	二ノ谷貝塚		酒詰仲男1935
13	南区八幡町35付近ノ1付近	中村八幡貝塚		富士谷孝雄1883, 酒詰仲男1938・1941
14	横浜市 西区老松町（野毛山貯水地西）			
15	宮崎町（伊勢山皇大神宮裏）	伊勢山貝塚	堀ノ内	神奈川県史1979
16	西戸部町2丁目179・190付近	池ノ坂貝塚	中～晩期	山田 惇1925, 松下胤信1929・1930, 石野 瑛1927・1938・1953・1955, 神奈川県史1979
17	伊勢町3丁目（暗黒坂付近）			
18	西戸部町1丁目（戸部字天王山）	天王山遺跡	勝坂	石野 瑛1953
19	（戸部字ヤブシタ）			
20	藤棚町2丁目（字古井戸）			
21	御所山町か（戸部 109番地）			
22	元久保町（久保山墓地）			
23	南区三春台・庚台か			
24	保土ヶ谷区岩井町か（岩間村）			
25	岩井町（岩間大原供養塚）			
26	横浜市 南区堀之内町1丁目（県警堀の内住宅近傍）	貝塚		酒詰仲男1938
27	堀之内町1丁目（貝殻畑・女坂）			酒詰仲男1938
28	磯子区丸山1丁目 （字柿ヶ谷、県警堀の内住宅の前）	貝塚		酒詰仲男1938
29	滝頭1丁目か			
30	岡村2丁目（岡村天神裏）			
31	汐見台3丁目（森大塚の東南）			
32	中原1～4丁目	森町貝塚か		西村正衛1954, 神奈川県史1979
33	杉田4丁目（八幡神社付近）			
34	岡村4丁目か	三殿台貝塚か		藤田清玖1899, 石野 瑛1927, 和島誠一1968, 神奈川県史1979
35	汐見台3丁目（大岡大塚）	平台遺跡か		神奈川県史1979
36	横浜市神奈川区綱畑か	青木町貝塚か		
37	三ッ沢西町（豊額寺近傍）	豊額寺付近	勝坂・加E	石野 瑛1927・1953
38	鶴見区鶴見2丁目（字二見台）	二見台貝塚か		内山九三郎1894, 八幡一郎・甲野 勇1926
39	鶴見2丁目	総持寺内貝塚か	弥生	八幡一郎・甲野 勇1926, 酒詰仲男1959（池谷健治教示）
40	東寺尾東台	荒立貝塚	勝坂・加E ・堀ノ内	酒詰仲男・竹下次作1934, 松岡六郎1937, 中川直亮1938, 酒詰仲男・芹沢長介1938AB, 神奈川県史1979
41	（東寺尾字鶴見蛇池ノ上）	花月園内貝塚か		井上喜代治・鳥居龍藏1893, 石野 瑛1938, 酒詰仲男1959
42	（東寺尾）			
43	馬場4丁目	馬場貝塚か		
44	岸谷町2丁目	風早台貝塚	稲荷台・田戸 ・茅山・諸磯	甲野 勇1924, 神奈川県史1979
45	神奈川区子安台1丁目	打越貝塚	黒浜・諸磯	移川子之蔵・橋本増吉1925, 石野 瑛1938・1953・1963
46	大口仲町・松見町1丁目か	大口台貝塚か	中期	石野 瑛1958, 塚田 光1965, 安藤広道・鹿島保宏・鈴木重信1992
47	大口通（面滝）	稲荷山貝塚	諸磯	石野 瑛1953, 酒詰仲男1959
48	子安通1丁目（本慶寺山）			
49	小田原市前川（近戸神社辺）			
50	小田原市曾我谷津（寺前）			
51	中井町井ノ口			
52	大磯町虎御石前			
53	平塚市土沢			
54	平塚市（金目村）			
55	（大住郡岡崎村）岡崎か			
56	伊勢原市伊勢原付近			
57	平塚市岡崎（大畑）			
58	伊勢原市西富岡			
59	秦野市文京町（本町小学校前）			
60	秦野市渋沢			
61	秦野市上大槻（大槻天神付近）			



第3図 小林與三郎発見遺跡分布図(1)縮尺4万分の1
(横浜市中区・西区・保土ヶ谷区, Aは稲荷山貝塚, bは中台貝塚)

ゾノダイは今の根岸加層台である。不動堂はその西側に位置する。早期の撚糸文土器が知られる（『横浜市史』1958）。この地域の遺跡や貝塚については岡野隆男1973、井上義弘・植木律之1979の再検討がある。岡野の検討は丁寧である。

中村1187番地は八幡貝塚として知られるもので、同番地は現在の八幡町35番地付近である。八幡神社は八幡町1番地にあり、丘陵の北端にあるが、35番地は内側の支丘先端に位置する。2地点に別れると思う。35番地付近（旧中村1187番地）に富士谷孝雄1883は地点を示しており、酒詰仲男は一時疑ったが（酒詰1938）、富士谷の報告に基づいて再確認している（酒詰1941）。八幡神社境内で貝の散布を認めたが貝塚に起源するものかどうかは検討したい。

地名表第3版にみえる北方天沼キリン麦酒製造所構内遺跡は、山手の諏訪町北方小学校周辺にあたる。関東大震災で鶴見区へ移転するまでキリンビール工場があったところである。

本牧村二ノ谷入口右方字オヤト貝塚は詳細は不明であるが、二ノ谷は現在の間門町で間門小学校の周辺と思われる。県台帳には掲載されていたが地点は示されていない。酒詰仲男は所在地を検討し（酒詰1935）、「化石貝層らし」と疑っている（酒詰1938）。石野の示した地点は岡野の検討があるように別地点である。

（2）西区周辺（第3図）

野毛山貯水地西端ノ畑（土器・黒曜石）は市遺跡地図の西区No.14であろう。野毛山大神宮裏手貝塚（打磨石斧・土器）は、伊勢山貝塚（『神奈川県史』1979）で西区No.15である。

『ものがたり西区の今昔』（西区の今昔編集委員会1973）に遺跡の所在地が検討されている。第1版の税関山と、小林の報告した第2版の戸部税関官舎付近字池ノ坂は同一で、第4版以降は整理されている。戸部監獄署構内ヨリ暗黒坂付近は池ノ坂の斜面下方に位置し、戸部監獄署は現在の神奈川県職員アパートである。地名表第2版にある大谷木耐三による戸部968番地も含まれるかもしれない。天王山は不明であるが、県市遺跡地図などでは西戸部町3丁目付近に位置するとされる。石野瑛は勝坂式土器を採集している（石野1953・1963）。『ものがたり西区の今昔』では字山王山として、池ノ坂貝塚に含まれている。西戸部町1丁目付近である。ヤブシタは藪下とも表記されるが地点不明（酒詰1938）である。これも池ノ坂貝塚に含まれるかもしれない（西区の今昔編集委員会1973）。税関西戸部分庁舎のある1丁目43番地奥と2丁目179番地付近で貝の散布をみた。池ノ坂貝塚は石野瑛が1922年に調査し、1951年に発掘しているが（石野1955）、地主の長男の金子登は芸大教授でその妻は金子エリカであるという。東京教育大学で国分直一とともに文化人類学、考古学を教えていた。

古井戸は現在の藤棚町2丁目であり、西側に稲荷台貝塚がある。

久保山墓地は広大で詳細不明。太田より久保山墓地に行く左方の台塚近傍も不明であるが、南区三春台か庚台付近と思われる。

岩間村は保土ヶ谷区岩間町から岩井町にかけて広がり詳細不明である。大原クヨウ塚は地点不明であるが大原は現在の岩井町内の字名であり、東海道の南側に位置することから先の岩間



第4図 小林與三郎発見遺跡分布図(2)縮尺4万分の1
(横浜市南区・磯子区)

村も岩井町内の可能性がある。

小林は、地名表第3版で池ノ坂で磨石斧を新たに加え、戸部109番地で打石斧を採集したことを報告した。戸部109番地は現在の御所山町にあり、低い段丘面に位置する。

（3）南区・磯子区周辺（第4図）

堀ノ内村（神奈川県爆発物貯蔵庫近傍）貝塚など周辺3件は、酒詰仲男の検討ではほとんど確認できず、壊滅、壊滅？、貝塚なりしや稍疑はしなどとされ現在は省略されることが多い。神奈川県爆発物貯蔵庫の位置は、現在の県警堀の内住宅であり、南区堀之内町にある。貝殻畑の地名は再確認できていないが、女坂、柿ヶ谷は江戸・明治期の字名で古地図で確認できた。女坂は県警堀の内住宅の西側の堀之内町にあり、にあり、柿ヶ谷は南側にあって磯子区丸山1丁目にある。犬殺の家は不明だが爆発物貯蔵庫の前に位置する。酒詰は沖積地の石鹼工場跡にて貝類と土製品・陶磁器を採集しているが塵溜に近いとする（酒詰1959）。市遺跡地図では、磯子区No.6遺跡（丸山1丁目23付近）で「破壊、（小貝塚も存在した？）」と備考に記している。また石野瑛は、その地名表に爆発物倉庫跡付近と貝殻畑をあげているが（石野1953・1963）、前者はその北側にある「睦町か」としている。女坂の北側にて貝の散布を見た。

屏風浦村大字岡根岸監獄裏手は、現在の磯子区丸山2丁目にあたり、岡村3丁目から滝頭1丁目付近と思われる。天神宮裏手台は岡村2丁目の岡村天満宮の裏手の岡村公園付近であろう。磯子区No.15遺跡付近か。大字森字森の大塚の東南の崖はまだ未確認であるが後述の大岡村大塚と関連するものと思われる。

屏風ヶ浦村中原は、現在の磯子区中原であるが現在の周知の遺跡はない。3・4丁目は台地上だが、1・2丁目は低地である。北側に森貝塚があり、その可能性がある。南側に杉田貝塚がある。杉田村八幡神社付近は、杉田4丁目の杉田八幡宮を指すものと思われるが、ここも周知の遺跡はない。北側に東漸寺貝塚があり、低地の遺跡として広がりがあったのだろうか。石野は森大塚付近と中原町を地名表にあげている。

大岡村岡村であるが、大岡村には岡村はない。岡村は屏風ヶ浦村にあり、大岡村と屏風ヶ浦村との境界にある三殿台貝塚の可能性が高い。三殿台貝塚は、医者の藤田清玑1899によって発見されたとされるが同一遺跡の可能性があろう。

大岡村大塚ノ傍は現在の磯子区汐見台3丁目の汐見台団地内に位置する。『神奈川県史』1979の平台遺跡に相当するものと思われ、丘陵の最高位置にあり古墳の可能性もある。森村と隣接し、森の大塚とも関連するかもしれない。

（4）神奈川区・鶴見区周辺（第5図）

現在の三ッ沢西町の豊顕寺の裏手には市民の森や慰霊塔があって石器時代の遺跡もあってよい地形がある。石野瑛も豊顕寺付近や西南方で遺跡を確認しているが、三沢貝塚の可能性はないだろうか。神川町は神奈川町の誤りで高島山裏手付近は高島台付近であろう。桐畑の青木町貝塚の可能性もあるかもしれない。小林は地名表の第3版で豊顕寺近傍に石鏃を補足している



第5図 小林與三郎発見遺跡分布図(3)縮尺4万分の1
(横浜市神奈川区・鶴見区, Cは三ッ沢貝塚)

ので、継続的に来訪していたのであろう。

子安村から生見尾村の遺跡は第3版に登場するので、新しく確認した遺跡である。鳥居以来、多くの人が遺跡を発見していて重複もあるようである。

子安村本慶寺裏山ノ新道は、現在の遺跡地図には登録されていないし、子安通3丁目の本慶寺の裏には東海道線が走るのみで山はない。しかし、『神奈川区誌』1977によれば本慶寺の裏に現在の浅野山からつづく本慶寺山があり、初期の海岸埋め立てによって削られたという。遺跡は早くに失われており、貴重な記録であったというべきであろう。

子安村稲荷山貝塚は、石野瑛や酒詰仲男らは、面瀧稲荷山貝塚ともいい、実査して諸磯式土器を出す貝塚が確認されている。しかし現在の遺跡地図にはない。1928（昭和3）年の地図に大口駅付近に面瀧の地名があり、大口台遺跡から東南にのびる尾根の北側斜面にあった貝塚と思われる。考古学史で著名な大口貝塚も実は遺跡地図に掲載されていない。『神奈川県史』1979では大口台遺跡の東南にあったとあり、大口台遺跡からの道が坂となる大口駅に近い位置にあったものと思われる（註7）。

子安村西寺尾コガイ原焼場ノ前ノ塚近傍は、現在の松見町2丁目にある西寺尾火葬場を指すものと思われる。コガイ原、塚は未確認であるが大口台遺跡（No.33）の可能性があると思う。石野瑛は芋久保遺跡として1954年に発掘調査している（石野1958）。大口台遺跡はさらに岡本先生や塚田光によって発掘され（塚田1965）、横浜市埋蔵文化財センターによって発掘されている（安藤・鹿島・鈴木1992）。石野1953では別遺跡を火葬場付近遺跡として弥生土器と磨石斧を確認している。これは神奈川区No.32遺跡をさすのであろう。

子安村ツクリ松貝塚は、鶴見区風早台貝塚と同一とみる酒詰仲男の見方もあるが、小林と石野瑛は別のものとしている。石野は子安町打越つくり松に所在する打越貝塚とし、「横浜市神奈川区子安町打越つくり松の浅野学園の運動場の西側につづく松林の中の貝塚のへりである。そこに仰臥した人骨があって、その耳のところに二枚貝をより小さなものを中にして五重ぐらいいにかさねておいてあった。」と述べている（石野1963）。

生見尾村は生麦村と鶴見村、東寺尾村が合併して1889年に成立したものである。

生麦の瀧坂不動上で東寺尾の字カザハヤで貝塚を確認している。風早台貝塚で甲野勇が1924年に山内清男と八幡一郎らとともに発掘している（甲野1924）。甲野は大里雄吉1924の発見とするが小林によるものである。また移川子之蔵と橋本増吉も子安池谷貝塚として発掘している（移川・橋本1925）が、これを石野は打越ツクリ松貝塚としている。石野瑛は打越ツクリ松貝塚は、浅野学園の西方にあるとすることから別遺跡とも考えたが、甲野勇と移川子之蔵らの報告からは酒詰仲男1938・1959がまとめられているように同一遺跡である。現在は北側（鶴見区）は生麦中学校となり、南側（神奈川区）は子安公園となっている。中学校の周囲と公園内に広い貝塚の散布を認めることができる。甲野の調査地点は中学校の講堂となってしまったが、丘陵の縁には貝塚が広く存在する。滝坂不動は今ではなかった。

第5図 横浜市とその周辺の遺跡数

()内は小林発見遺跡数

地名表版・年	横浜市	久良岐郡	橋樹郡	都筑郡
第1版・1897	1	3	16	3
第2版・1898	12 (11)	22 (19)	35 (4)	9
第3版・1901	14 (13)	24 (20)	49 (15)	10
第4版・1917	39 (33)	7 (3)	46 (5)	16

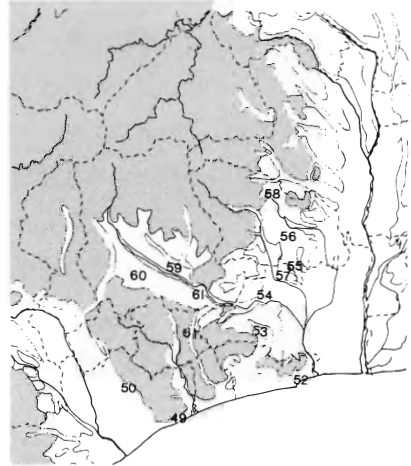
東寺尾字原の斎藤市五郎の所有する畑中に貝塚を確認している。東寺尾村の字原は確認できない。これを酒詰は荒立(台上)貝塚と同一視しているが、昭和5年頃の横浜市土地宝典によれば斎藤市五郎の所有する畑は馬場4丁目の宝蔵院の周辺に多く集中し、鶴見区No.94遺跡の周辺と思われる。ただ地名との関連を検討する必要がある。

大字鶴見字二見台射的場上ノ畑中電柱ノ下貝塚は、酒詰仲男は馬場(北)貝塚にあてているが地点は確認できなかったようである。遺跡地図にもないが、鶴見字二見台、現在の鶴見2丁目付近に考えたい。馬場町には帝国猟友会射的場があったようだ。同所ヨリ一丁程神奈川ノ方ニ寄タル處電話柱 609号ノ下貝塚については、酒詰は荒立(台上)貝塚にあてているが、二見台から100m以上あり違うものと思われる。

荒立貝塚は東寺尾東台に位置する。小林の指摘した同所付近字東台は荒立貝塚の一部と思われる。第二国道建設によって破壊されたが、その直前に多くの人が発掘している。中川直亮1938、酒詰仲男・芹沢長介1938らが発掘し、松岡六郎1937の東寺尾貝塚も本貝塚である。

東寺尾字鶴見蛇池ノ上貝塚も難しい。東寺尾と鶴見は大字が異なり、その境界付近と思われるが蛇池が見つからない。酒詰は鶴見町東台と生麦町岸との境の鶴見三笠園内貝塚と推定したようであるが、貝塚本体を確認したのではない(註8)。三笠園内には房野池があったという。蛇池は『鶴見区史』1982の明治15年の農業用水溜池分布図にもない。現在の鶴見総持寺境内に含まれた成願寺三ツ池か、東福寺仁王門の奥にあった小池の可能性が高い。小池は花月園内のスワン池となった。総持寺の背後には貝塚があったという(八幡・甲野1926)。石野瑛は花月園内にも貝塚があったとするが詳細は不明である(石野1938)(註9)。酒詰仲男はこれを検討したが再確認できなかったようである(酒詰1959)。小林は東寺尾で石鏃を採集しているが、これは手がかりが少なく地点は不明である。地名表の第4版では、鶴見区関係の小林の発見した遺跡の多くは整理され、抹消されているができるだけ復元したいものである。

地名表の第1版から第4版までの横浜市とその周辺の遺跡数は第5表のようにまとまった。初期における小林與三郎の役割は重要であった。

第6図 小林與三郎発見分布図(4)
(神奈川県相模地域)

4. まとめ

小林與三郎の人物像は、まだ解らないことだらけである。沼田頼輔のいう「斯学篤志の人」,「釜山郵便局」に勤めたことが判明した。恐らく同僚後輩の新居勝三郎を人類学会に紹介して本人は退会してしまったものと思われる。故郷に錦を飾ることもなく、韓国の地に没したのかもしれない。

しかし、1897年から99年にかけての3年間の活躍は眼に余るものがある。横浜だけでなく、神奈川県西部も平塚、伊勢原、秦野、小田原、中井、大磯の4市2町にて遺跡を発見している（第2表、第6図）。東京にもたびたび出掛けているようであり、全国に出張して奈良・石川・長野・静岡・埼玉・千葉・山形・青森の10都県で百余りの遺跡を発見しているのである。その行動力の源はなんだったのであろうか。大学、おそらくは東大出の通信関係の官僚であったのだろうか。

年令も没年もまだ確認できない。栃木県での発見遺跡は宇都宮市北郊に集中しているので、その周辺（旧豊郷村か）の人であったと思われる。日清戦争の始まった1894年に4ヶ月もかけて栃木県野沢遺跡の発掘を行なっていることは、好奇心溢れる若者を想起させる。しかし、1897年から1899年の3年間に4回も人類学会で研究発表を行なっているのは、やや年長者であると思われる。自分で論文をまとめることはなかったが、土器や石器など遺跡を見つけることは得意であったようだ。杉田八幡宮、豊顕寺、岡村天満宮などは当時の名勝地、行楽地であり、行楽の途次に遺跡を見つけたことも多かったに違いない。

その斯学篤志の人も韓国に移っては、行動力をほとんど示さなかったが、八木英三郎の探検を助け、後輩を育てていた。このことは日本考古学史の重要なひとこまである。日本考古学、日本国の歴史において韓国、アジアを明確に対象化して位置づけておくことは今の世の中において欠くべからざるものであるが、郵便史の研究において見るものがあることを発見したのは今回の収穫であった（水原1993、藪内2000）。

小林與三郎の発見した48遺跡は、横浜の考古学の基礎となった。これ以後マンローの調査や、1920年代以後の石野瑛や谷川（大場）磐雄らの武相考古会（『武相研究』刊行）や、1930年代の池田健夫、斎藤房太郎、松下胤信、池谷健治らの横浜考古学研究会（『丘の上』刊行）らの調査研究が積み上げられていく。しかし、現在の横浜の考古学においてこれらの認識はきわめて弱いものでしかない。岡本勇先生の考古学史研究をさらに発展させたい。100年の考古学史をその最初期にさかのぼって追体験することによって、赤星直忠の生誕100周年となる2002年を「神奈川考古学赤星年」とする事業に備えたい。

神奈川県下の貝塚については、岡本勇先生のもとに参集した貝塚研究グループによる再確認の調査が進んでいると聞いていたが、その成果はまだ公表されていない。しかし、今再び、川口徳治朗氏を中心とする「神奈川の貝塚に学ぶ会」によって県下の貝塚の再調査、巡検が進ん

でいる。酒詰仲男の仕事、和島誠一、岡本勇先生らの『横浜市史』に見るように、考古学は歩かねばならない、歩けオロジーといわれる由縁である。

註

- (1) 陸奥のうちに東津軽郡文栗坂がある。これは野内村久栗坂と第4版にて訂正される。私は大学生の時、1967年9月に江坂先生の発掘に参加した。大森（縄文）時代後期の甕棺再埋葬の遺跡として著名であり（喜田1934）、石棺墓群を発掘した。

喜田貞吉 1934 「青森県出土の洗骨入土器」『歴史地理』63-6

江坂輝彌 1967 「青森県久栗坂山野峠遺跡」『考古学ジャーナル』13

- (2) 1910（明治43）年11月1日の『朝鮮総督府通信官署職員録』に新居勝三郎の名を見いだすことができた。京城郵便局（京畿道京城本町1丁目）工務掛、龍山駐在 通信技手4級 新居勝三郎とあり、京城桜田町1丁目の龍山郵便局においても同様の記載があった。

- (3) 稲荷山貝塚は、富士塚、藤塚貝塚とも呼ばれ、1883（明治16）年9月の『学芸志林』に富士谷孝雄（東京大学助教授）による「中村穴居考」に初めて示され、著者不明の1886の『東京人類学会報告』の記事に引用される。坪井正五郎と白井光太郎は富士谷に教授されて、中村の横穴や貝塚を調査した（白井1932）。この後、井上・鳥居の調査記録となり（井上・鳥居1893）、池田健夫らの横浜考古学研究会によって発掘された（池田他1935）。戦後は米軍接収地となったため所在が確認できなかったが、大雨によって崖面が崩落して所在が判明し、かながわ考古学財団が2000年に発掘調査し、見学することができた。感謝申し上げます。『南区の歴史』1976でも藤塚の位置を確認できる。

なお、富士谷以前の横浜の考古学調査として、J. ミルンの採集と博物局の大橋某による確認があったことを白井は指摘している。1879（明治12）年のことである。ミルンは坪井のコロボックル説に対してアイヌ説を述べて学史に登場する。大橋による採集品は、今も東京国立博物館に保管されている（東京国立博物館 1956 『収蔵品目録（考古、土俗他）』）。

- (4) 酒詰仲男1935は、「オヤトは、マカド（間門）の誤植であろう」とするが、出典を坪井正五郎1888とすることにおいて間違っていた。小林の地名表記が原典である。平台貝塚は岡野隆男らによって1965年に発掘され（岡野1973）、1985年に横浜市埋蔵文化財調査委員会（平子・橋本1986）、1992年に神奈川県立埋蔵文化財センターによって発掘されている（伊丹1993）。

- (5) 1932年に刊行された『横浜市史稿』神社・教会編では、市内の金刀比羅神社は中区真金町1丁目3番地と、中区新山下町3丁目5番地の5に所在する。本牧町天徳寺708番地には琴平神社がある。真金町の金刀比羅神社は安政6年に金毘羅大権現として港崎町に祀られ、以後吉原町、高島町に移転し、真金町に明治15年に移転したという。新山下町の金刀比羅神社は弘化4年に堺町の南の方に祀られ、太田町6丁目、尾上町2丁目（旧緑町）、伊勢山（宮崎町63番地）に移転し、昭和3年に新山下町に移転したという。また外人墓地の隣接地にあった増徳院の境内隣接地にも神社があったが、これは弁天様であった。今、平楽の丘陵上に移転した増徳院のご住職、藤井義章氏から教示を受けた。感謝申し上げます。

1860（万延元）年3月に五雲亭貞秀の描いた「東海道名所之内 横浜風景」に増徳院に隣接して弁財天、金毘羅が描かれている（本牧のあゆみ研究会 1986 『本牧のあゆみ』所収）。川口徳治朗氏は、以前において金比羅神社を確認している。ご教示感謝いたします。

- (6) 白井光太郎は、坪井正五郎とともに1883（明治16）年8月に中村字道場の横穴を調査しているが、富

土塚（稲荷山）貝塚も確認し、さらに「字馬場に開墾地あり」、石斧を得たという（白井1932）。これは磯子区馬場町にかかわる開墾地が台地上にあったことを示している。

- (7) 学史上著名な大口坂貝塚の位置については、『横浜市文化財地図』1992にも掲載されていないが、安藤ら1992の『大口台遺跡』にはその西南に位置を示してある。これは酒詰仲男1938や石野瑛1953・1963のいう「大口920番地」に基づくのかもしれない。しかし酒詰仲男1959では、920番地は大口仲町貝塚としており、大口坂貝塚とは別としているので違うものと思われる。地形的にも一致しない。
- (8) 岸谷公園の谷の東側斜面にある階段道の北側で貝の散布をみた。石野・酒詰の三笠園内貝塚と思われる。
- (9) 井上・鳥居1893に東福寺仁王門付近に貝殻の散布していることを指摘している。

文献

- 阿部正功 1893 「貝塚土器塚。横穴。所在地名表」『東京人類学会雑誌』90
- 池田健夫・斎藤房太郎・佐藤陽之助 1935 「神奈川県横浜市中区中村町稲荷山貝塚発掘調査概報」『史前学雑誌』7-1
- 石野 瑛 1927 『横浜近郊文化史』
- 石野 瑛 1938 『武相史蹟名勝総覧 横浜市』
- 石野 瑛 1953 『神奈川県大観』1 横浜・川崎
- 石野 瑛 1955 「神奈川県横浜市池ノ坂貝塚」『日本考古学年報』3
- 石野 瑛 1958 「神奈川県横浜市芋久保貝塚」『日本考古学年報』7
- 石野 瑛 1963 『神奈川県史概説』始原より平安時代
- 伊丹 徹 1993 『平台貝塚』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告28
- 井上喜久治・鳥居龍蔵 1893 「梅沢、横浜、貝塚探見記」『東京人類学会雑誌』83
- 井上喜久治・鳥居龍蔵 1893 「鶴見川沿岸貝塚探見の記」『東京人類学会雑誌』88
- 井上義弘・植木律之 1979 「埋蔵文化財」『新本牧地区文化財等事前調査報告書』中区郷土研究会
- 内山九三郎 1894 「玉川沿岸の貝塚（摘要）」『東京人類学会雑誌』94
- 移川子之蔵・橋本増吉 1925 「子安池谷貝塚発掘及び人骨出土状態概報」『史学』4-4
- 大里雄吉 1924 「東京市及び其付近に於ける石器時代遺物新発見地名表（東大地名表補遺）」『歴史地理』43-2
- 岡野隆男 1973 『平台貝塚』
- 岡本 勇 1985 「明治時代神奈川県下考古学研究の先駆者たち」『神奈川地域史研究』2
- 岡本 勇 1992 「かながわの考古学をきづいた人たち」『考古論叢神奈河』1
- 岡本孝之 1975 「日本＝東亜（朝鮮）考古学批判（1）」『異貌』3
- 岡本孝之 1999 「考古学研究のあゆみ」『平塚市史』11上 別編考古(1)
- 栗原清一 1928 『横浜の史蹟と名勝』横浜叢書第一編
- 甲野 勇 1924 「武蔵国橋樹郡生見尾村貝塚発掘報告」『人類学雑誌』39-4・5・6
- 小林與三郎・沼田頼輔 1900 「下野国河内郡野沢発見の土器に就て」『東京人類学会雑誌』15-166
- 斎藤 忠 1977 「栃木県考古学史の一断面－明治時代の考古学」『栃木県史研究』14
- 斎藤 忠 1990 『日本考古学史の展開』日本考古学研究 3
- 斎藤 忠 2000 『郷土の好古家・考古学者たち（東日本編）』
- 酒詰仲男 1934 「横浜市根岸町競馬場付近発見の貝紋土器片」『史前学雑誌』6-4
- 酒詰（土岐）仲男・竹下次作 1934 「神奈川県鶴見付近の諸貝塚」『史前学雑誌』6-5

- 酒詰(土岐)仲男 1935 「神奈川県下に於ける性質不明の二貝塚(?)に就いて」『史前学雑誌』7-6
- 酒詰仲男 1938 「神奈川県下貝塚調査概報(1)~(3)―「貝塚遺跡による古代集落の研究」の一部」『人類学雑誌』53-1・2・3
- 酒詰仲男・芹沢長介 1938 「横浜市鶴見区荒立台上貝塚に於ける住居跡の発掘」『考古学雑誌』28-1
- 酒詰仲男・芹沢長介 1938 「横浜市鶴見区荒立(台上)貝塚発見文化遺物に就いて」『考古学雑誌』28-2
- 酒詰仲男 1941 「横浜市中村八幡社近傍貝塚の再発見」『民族文化』2-7
- 酒詰仲男 1959 『日本貝塚地名表』
- 酒詰仲男 1967 『貝塚に学ぶ』
- 白井光太郎 1932 「武蔵国久良郡石川中村穴居記」『ドルメン』6(9月号)
- 杉原荘介 1936 「下野・野沢遺跡及び陸前・樹形囲貝塚出土の弥生式土器の位置に就いて」『考古学』7-8
- 坪井正五郎 1888 「貝塚とは何で有るか」『東京人類学会雑誌』29
- 塚田明治 1974 「横浜市中区元町貝塚の現状調査」『横須賀考古学会年報』17
- 中川直亮 1938 「横浜市鶴見区荒立に於ける遺跡」『史前学雑誌』10-1
- 西村正衛 1954 「横浜市屏風ヶ浦森町貝塚」『日本考古学年報』2
- 藤田清玕 1899 「武蔵国久良郡屏風ヶ浦岡村貝塚発見報告」『東京人類学会雑誌』14-158
- 富士谷孝雄 1883 「中村穴居考」『学芸志林』13
- 松岡六郎 1937 「武蔵東寺尾貝塚」『考古学雑誌』27-12
- 松下胤信 1929 「帷子溪谷の石器時代遺物発見地名表」『史前学雑誌』1-5
- 松下胤信 1930 「横浜市中区根岸町ヒナソ貝塚出土の土偶と曲玉」『史前学雑誌』2-5
- 松下胤信 1930 「武蔵大岡・帷子両溪谷に於ける二三の貝塚」『人類学雑誌』45-12
- 松下胤信 1933 「横浜市中区山手貝塚調査概報」『史前学雑誌』5-2
- 水原明窓 1993 『朝鮮近代郵便史1884-1905』財団法人日本郵趣協会
- 八幡一郎・甲野 勇 1926 「武蔵国鶴見町二見台の遺跡に就て」『人類学雑誌』41-1
- 戴内吉彦 2000 『日本郵便発達史』
- 山田 惇 1925 「横浜市池ノ谷貝塚追想記」『武相研究』2-1(未見)
- 山内清男 1932 「下野国河内郡国本村野沢の土器」『史前学雑誌』4-1
- 吉田文俊 1905 「石器時代遺物発見地名表(続き)」『東京人類学会雑誌』229
- 著者不明 1886 「横浜富士塚貝塚」『東京人類学会報告』10
- 磯子区制50周年記念事業委員会 1978 『磯子の史話』
- 神奈川区誌編さん刊行実行委員会 1977 『神奈川区誌』
- 神奈川県(赤星直忠・岡本 勇) 1979 『神奈川県史』資料編20考古資料
- 神奈川県教育委員会 1971 『神奈川県埋蔵文化財遺跡地図』第2版
- 鶴見区史編集委員会 1982 『鶴見区史』
- 中区制50周年記念事業実行委員会 1985 『横浜 中区史』
- 西区の今昔編集委員会 1973 『ものがたり西区の今昔』
- 南区の歴史発刊実行委員会 1976 『南区の歴史』
- 横浜市(和島誠一・岡本 勇) 1958 『横浜市史』1
- 横浜市教育委員会 1992 『横浜市文化財地図』
- 横浜西区史編集委員会 1995 『横浜西区史』